

2014年11月2日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 19章 41～48節

説教：わたしの家は祈りの家

1 エルサレム陥落についての二つの預言

1) イエスの預言 AD70年

今日の箇所は、エルサレムを目前にしてイエスが涙を流した場面から始まります。イエスは、エルサレムが将来厳しくさばかれていく、そんなことを語っているように見えます。それも、涙を流されながらですから、よほど強く心が動かされています。実際、エルサレムは西暦70年にローマ軍によって破壊されました。イエスはそのことをここで預言したと多くの人は考えています。

2) エレミヤの預言 BC586年

けれども、旧約聖書を開くとエレミヤ書6章6節にも似たようなことばが出て来ます。「まことに万軍の主はこう仰せられる。「木を切って、エルサレムに対して壘を築け。これは罰せられる町。その中には、しいたげだけがある。」」

エレミヤが語った預言はどうなったのでしょうか。紀元前586年にバビロニア帝国に攻め込まれ、エルサレムは滅ぼされてしまいます。エレミヤの預言は成就しました。

エルサレムが徹に攻められて陥落する、そのことを預言した二つのことばを取り上げました。かつてエレミヤが語り、そしてここではイエスも語ります。ことばを比べてみるとほとんど同じです。イエスは、エレミヤのことばを意識して語っております。何か関係がありそうです。

3) エルサレムがさばかれた理由

そもそもどうしてエルサレムがさばかれなければならなかったのでしょうか。エレミヤの場合とイエスの場合。それぞれを見てみましょう。

まずエレミヤの時代のことから見ます。エルサレムがさばかれる理由について、エレミヤ書6章13節に書かれています。「なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得をむさぼり、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行っているからだ。」

神の正義がねじ曲げられていました。だから神はエルサレムをさばくのだからというのです。

ではもう一方のイエスの場合はどうでしょうか。エレミヤとは違う書き方になっています。44節の後半です。「それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」これはいったいどういうことか。次の箇所を見ながら考えていきます。

2 エルサレムに戻るイエス

1) 神殿の中で

イエスはエルサレムに入ってすぐに神殿に向かいます。当時の神殿の中の様子がどうであったのか。そのこと考える材料として一つの例をお話しします。

昨年、妻の先祖の墓がある東京の青山墓地を訪れました。そうしますと日本でも有名な墓地ですから、お墓参りする人がたえません。すぐそばにお花屋さんが何件もあって、店の中には墓参りするために来た親族がお茶を飲んで休憩できるお部屋もありました。お店

の棚には「〇〇家」と書かれた水桶が沢山並べられていました。そこでは、お線香、ろうそく、なんでも必要な物が揃うようになっていて妙に感心しました。

エルサレムの神殿もそれと同じです。何も持たずにやって来て必要なものが全部揃う。そこに商売人たちが集まります。もちろん勝手に店を出す訳にはいきません。神殿を管理している事務所に行って許可をもらい、場所代を払わなければなりません。だれが神殿を管理していたのか。祭司長、律法学者たちです。

2) 乱暴なのは？

宮に入られたイエスは、その商売人たちを追い出しました。マタイの福音書によれば、店に置いてあった棚や椅子を倒したとあります。いつものイエスにしては、ずいぶんと乱暴な感じがします。もっと穏やかな方法をとるのが普通です。奇妙な印象がします。なぜこんなことをするのでしょうか。

理由は一つです。先ほども言いましたが、神殿を管理しているのは祭司長、律法学者たちです。自分たちの縄張りの中に、イエスが入って来て勝手に商売人たちを追い出しました。その結果はどうなるでしょう。暴力団どうしの縄張り争いを想像したらよいと思います。かーっと頭に血が上った若い者がとっさに刃物を手にしてイエスを殺そうとする。そんな場面です。けれどもすぐには殺せません。イエスは今や大スターですから、人の目があるので簡単には手を出ません。強いブレーキがかかっています。

前回は、イエスがろばの子に乗ってエルサレムに向かうとき、人々が歓声で迎えていく場面でした。ろばの子に乗るイエスを見て、

イエスを憎む人たちは苦々しく思ったはずです。今日の箇所では、相手を怒らせるために、乱暴なことまでされます。イエスは、このようにあらゆる手段を使って怒りの炎に油を注ぎ、ご自分が十字架に向かうことを決定的にしていきます。まるで左足でブレーキを踏みながら、右足でアクセルを一杯踏んでいる状態です。

3) 神の訪れを知らない人たち

44節イエスはこう言っていました。「それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」

神は、いつエルサレムを訪れたのですか。まさにこの時です。神は宮に入られ、商売人を追い出しました。けれども、祭司長たちは神のひとり子である方をねたみ、憎み、殺そうと必死になります。彼らは神が神殿に入られたことをまったく知らないのです。その結果、どうなったのでしょうか。イエスを十字架につるしていきます。

イエスがエルサレムを見て涙を流して嘆かれたことと、イエスが祭司長たちの手によって十字架に追いやられていくこととは、このように大きなつながりがあります。ではどんなつながりか、もう少し詳しく見ます。

4) 取り囲まれるイエス

イエスがエルサレムに向けて何度も「おまえ」と繰り返していることに目を留めます。数えてみると十二回繰り返しています。イエスはエルサレムを救えないのでしょうか。エルサレムがひどいことになっていくことを知りながら、何もできないと言って泣いておられるのでしょうか。確かにエルサレムがさ

ばかれるのには理由はあります。神が来られたのに、その神を十字架につるしたのです。さばきを受けて当然かもしれません。

しかし、イエスは何をしましたか。ご自分が十字架に追いやられるために、あらゆることをしていました。もしイエスがろばの子に乗らず、宮の中で商売人を追い出すようなことをしなければ、殺されなかったかもしれない。でも、イエスはそうしたのです。それは誰のためですか。罪人である私たちのためでした。では、エルサレムはどうなのでしょう。

「おまえ」と言われているエルサレムはイエスにとって、なんですか。他人なのですか。関係がない町ですか。いいえ。ダビデが契約の箱を置いた町です。神の御臨在の場所です。言ってみれば、エルサレムはご自分のからだそのものではないですか。ならば、イエスはエルサレムをも救うために十字架に向かうはずではないですか。

大胆な提案に聞こえるかもしれませんが、十二回も繰り返される「おまえ」ということば、これを「イエス」と言い換えたらどうでしょうか。43節はこうなります。「やがてわたしの敵が、わたしに対して壘を築き、周りを取り囲み、四方から攻め寄せる。」そう読めます。これはなんですか。十字架の場面そのものではないですか。イエスは十字架につるされたとき、周りを取り囲まれ、逃げ場を失い、あらん限りのののしりを受けられました。

44節はこうなります。「そしてわたしと、わたしの所にいる子どもたちを地にたたきつけ、わたしの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままで残されない。」神殿の石が完全に崩されます。神殿はご自分のからだを指します。主が十字架で死なれることを指

しているようです。

このようにしてみると、イエスは、実際にエルサレムの町に起こることを示しつつ、ご自分の身に起こることとしても語っておられるようです。エルサレムが大変な目に遭っていくことを手をこまねいて悲しんでいたわけではありません。そのエルサレムを救うために、イエスご自身が私たちと同じ苦しみを味わおうとされている。そのように読むことができます。

3 祈りの家

さて最後に考えます。イエスは 46 節で『わたしの家は、祈りの家でなければならぬ』と書いてある」と言っている所です。どこに書いてあるかといえば、イザヤ書 56 章 7、8 節です。「わたしは彼らを、わたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のいけにえやその他のいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるからだ。—イスラエルの散らされた者たちを集める神である主の御告げ— わたしは、すでに集められた者たちに、さらに集めて加えよう。」

「祈りの家」と聞くと、熱心に人々が祈っている聖なる場所、というイメージですが、どうもそういうことばかりではなさそうです。神は罪人を集め、ご自分の家で楽しませて下さろうとしている。これはむしろ、「救いの家」と言い換えたほうがわかりやすいでしょう。

「わたしの家は、救いの家でなければならぬ。」そのように言われた主は、救いの家に私たちを集めるために、罪人の手にかかり、十字架につけられ、死んで行かれます。主は、

神の訪れを知ろうとしないエルサレムを祈りの家、救いの家としようとしています。それを成し遂げるために十字架に向かうアクセスを強く踏み込んでいきます。

主の恵みを思い起こします。